2026年度 第7回（12月）北辰テスト対策 予想問題　解答・解説

国語

1　問1（4点）

ウ

沙織は明日の朝には引っ越してしまう。陽菜は、沙織の声を「ひとつも聞きもらさないように」聞きながらも、さびしさで胸がいっぱいになり、自分は何も言えずにいる。

・ア 腹を立てているとは書かれていない

・イ 「いくらでもあったはずなのに」とあり、話題がないのではない

・ウ 沙織の転校が目前で、言いたいことがあるのに言えない様子（「ひとつも聞きもらさないように歩いた」とある）→正答

・エ 陽菜は沙織の転校を知っている（リード文）

採点ポイント:「いくらでもあったはずなのに」と「一つも言葉が出てこなかった」の対比から、言葉にならない思いを読み取れているか。

1　問2（4点）

ア

「また明日、って、言えないんだね」という沙織の言葉で、陽菜は別れを強く実感した。目をそらしたのは動揺をおさえるためで、「声が、のどの奥でひっかかった」という描写からも、涙をこらえていることが読み取れる。

・ア 直前の沙織の言葉で別れを実感し、目をそらして気持ちをおさえている。直後に「声が、のどの奥でひっかかった」とある→正答

・イ 怒りを示す描写はない

・ウ ポストに目を向けたのは、別の理由から

・エ 「声が、のどの奥でひっかかった」とあり、平気ではない

採点ポイント:「とっさに」目を向けた動作と、直後の「声が、のどの奥でひっかかった」を結びつけて読めているか。

1　問3（6点）

(例) 離れても続きを書くと約束し、二人のつながりを保ちたかった

正答例:

・(例1) 離れても続きを書くと約束し、二人のつながりを保ちたかった（28字）

・(例2) 別れたあとも会って続きを書くという約束で、友情を保ちたかった（30字）

根拠: 沙織は、ノートの最後のページを白いままにして陽菜にわたし、「次に会うときに、いっしょに書こう」と言った。引っ越して離ればなれになっても、また会ってノートの続きを書こうという約束をすることで、二人の友情を続けていきたいと願っている。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「約束」が使えている	1点	指定語必須
②「続き」が使えている	1点	指定語必須
③ 離れても（別れたあとも）という内容が示されている	1点	「離れても」等
④ 再び会って続きをいっしょに書くという約束の内容が示されている	1点	「いっしょに書く」等
⑤ 二人のつながり（友情）を保ちたいという願いが示されている	1点	「つながりを保ちたかった」等
⑥ 25〜35字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

1　問4（4点）

エ

陽菜は、受け取れば「今日が本当に終わってしまう」気がして、ためらった。「けれど」と気持ちを切りかえ、「両手を伸ばして」「しっかりと」受け取ったのは、別れを受け入れつつ、「次に会うとき」という沙織との約束を信じようとしたからである。

・ア 忘れようとする様子はない

・イ 「しっかりと」受け取っており、しかたなくという様子ではない

・ウ 中身を読みたがっているとは書かれていない

・エ 「すぐには受け取れなかった」が「けれど」で転じ、「しっかりと」受け取っている。つらさを抱えながら、再会の約束に向き合おうとしている→正答

採点ポイント: ためらいを表す前の文と、「けれど」のあとの動作を結びつけて読めているか。

1　問5（5点）

イ

結びの二つの文は、陽菜がふり返って大きく手を上げる動作と、遠くはなれた二人の影がポストの足もとで重なるという情景を描いている。別れの悲しみの中にも、二人のつながりが続いていくというあたたかな希望が感じられる。

・ア 「重なって見えた」は、つながりを表す描写で、終わりを強調してはいない

・イ いつもの「また明日」の手の振りとは別に、陽菜が自分から大きく手を上げたことと、「遠くはなれているのに……重なって見えた」から、つながりが続くことが印象づけられる→正答

・ウ 怒りやいらだちを示す描写はない

・エ 陽菜はふり返って、手を上げている

採点ポイント: 「手を上げた」動作と、「遠くはなれているのに……重なって見えた」の二つから、つながりが続くことを読み取れているか。

1　問6（5点）

ウ・オ

・ア: 枯れ葉の描写が、別れの場面のさびしさを表している→適切
・イ: 沙織の「うまく笑えない」様子から、沙織のさびしさが読み取れる→適切
・ウ: 沙織の転校は、リード文にあるように前から決まっていることで、陽菜が怒りをぶつける場面は描かれていない→不適切→正答
・エ: 「帰り道ノート」は、一年生の冬から続く二人の時間を象徴している→適切
・オ: 結びには、ふり返って手を上げる陽菜と、重なる影があり、つながりが続くことが表されている。関係が終わったとは描かれていない→不適切→正答
採点ポイント: ウ・オの2つを両方選んで正答（5点）。過不足があれば0点（部分点なし）。

2　問1(1)（2点）

きょしゅう

去就＝その場を去るか、とどまるかという身の処し方。どう行動するか、どういう態度をとるか。
採点ポイント: 「きょしゅう」。「きょじゅ」「こしゅう」などと誤らないこと。「去」は「キョ」「コ」、「就」は「シュウ」「ジュ」と読む。

2　問1(2)（2点）

はくしき

博識＝広く物事を知っていること。学識が広いこと。
採点ポイント: 「はくしき」。「はくしょく」「ばくしき」などの誤りに注意。「識」は「シキ」と読む。

2　問1(3)（2点）

勇

勇ましい＝力強く、危険や困難をおそれないようす。送りがなは「ましい」。「勇」は「ユウ」とも読む。
採点ポイント: 「勇」。上の部分の形と、下の「力」を正しく書く。「男」「湧」などと書き誤らないこと。

2　問1(4)（2点）

厳

厳しい＝ゆるすことなく、はげしいようす。送りがなは「しい」。「厳」は「ゲン」「ゴン」とも読む（厳格・荘厳）。
採点ポイント: 「厳」。画数が多いので、点画を正しく書く。部分的な誤りは不正解。

2　問2（3点）

ウ

「そうだ」には、様子を推しはかる「様態」と、ほかから聞いたことを伝える「伝聞」がある。見分け方は、直前の形。

・ア 「降り出し」＋そうだ＝動詞の連用形に続く→様態
・イ 「辛」＋そうだ＝形容詞の語幹に続く→様態
・ウ 「なる」＋そうだ＝終止形に続く。「天気予報によると」と、聞いた内容を伝えている→伝聞→正答
・エ 「泣き出し」＋そうだ＝動詞の連用形に続く→様態

採点ポイント: 直前が終止形か（伝聞）、連用形・語幹か（様態）で見分けられているか。「〜によると」も手がかりになる。

2　問3（3点）

ア

助動詞「た」には、過去・完了・存続・想起（思い出し）の意味がある。

・ア 「かかった絵」＝「かかっている絵」と言いかえられる→存続→正答
・イ 「昨年の夏」と、過去のことを述べている→過去
・ウ 「ちょうど今」終わったと、動作が完了したことを述べている→完了
・エ 「そういえば」と、忘れていたことを思い出している→想起

採点ポイント: 「〜ている」に言いかえられるかどうかを手がかりにして、存続を見分けられているか。

2　問4（3点）

ウ

「焼け石に水」＝焼けた石に少しの水をかけても冷めないことから、努力や援助が少なすぎて役に立たないこと。

・ア 二つのことを同時に望むと、どちらも失敗する
・イ 価値のわからない人に、貴重な物をあたえても無駄である
・ウ わずかな努力や援助では、大きな問題の前にほとんど効き目がないことのたとえ→正答
・エ 立ち去るときは、あとを見苦しくないようにする

採点ポイント: 「三十分だけ」の努力と、「残りの量が多すぎる」の二点から、ことわざの意味と結びつけられているか。

2　問5（3点）

エ

「灯台下暗し」＝灯台は遠くを照らすが、その真下は暗いことから、身近なことにはかえって気づきにくいこと。

・ア 名人でも失敗することがある
・イ 思いがけない幸運が舞いこむ
・ウ 見た目より実利を選ぶ
・エ 身近なことは、かえって気づきにくいことのたとえ→正答

採点ポイント: 「ずっと探していた」物が「自分の筆箱の中」にあった、という身近さと意外さを、ことわざの意味と結びつけられているか。

2　問6（3点）

イ

「藪をつついて蛇を出す」＝何もしなければ無事なのに、余計なことをして、かえって災いを招くこと。

・ア 小さなきっかけで大きな得をするという、別の意味の文
・イ 藪をつつくと、潜んでいた蛇が出てくることから→正答
・ウ あえて危険に立ち向かうという、別のことわざにあたる意味
・エ 小さなことを大げさに言うという、別の意味の文

採点ポイント:「つつく」→「蛇が出る」という流れを、「余計なことをして悪い結果を招く」と結びつけられているか。

2　問7（3点）

ア

「情けは人のためならず」＝人に情けをかけるのは、その人のためだけではなく、めぐりめぐって自分にもよい結果が返ってくるから、という意味。「情けをかけると、その人のためにならない」という意味ではない。

・ア 「人のためならず」＝人のためだけではない、という意味→正答
・イ よくある誤用。「ためならず」を「ためにならない」と取り違えている
・ウ ことわざの意味ではない
・エ ことわざの意味ではない

採点ポイント:「ならず」を「ためにならない」と取り違えず、「〜のためだけではない」と読めているか。

2　問8（2点）

イ

司会は、石川さんの「盛り上がる」という意見と、森さんの「楽しめない人も出る」という意見の、二つを受けとめている。空欄のあとの「では、曲を選ぶときの基準を……決めてから」へ自然につながるのはイ。

・イ 盛り上がりと、だれもが楽しめることの両方が大切だと整理している→正答
・ア 石川さんは流行の曲を外すとは言っていない
・ウ 森さんの意見を取り上げないのは、あとの発言とつながらない
・エ 放送を取りやめるという結論は出ておらず、「候補を出し合いましょう」とも合わない

採点ポイント: 空欄の前後の流れから、司会の役割（二つの意見をつなぐ）を読み取れているか。

3　問1（4点）

ウ

①の直前に、「だから私たちは、いつのまにか、学ぶとは正しい答えを手に入れることだと思いがちである」とある。答えを得れば学びは終わると思うので、考えるのをやめてしまう。

・ア 本文にそのような説明はない
・イ 考えることが苦手とは述べていない
・ウ 第1段落に「学ぶとは正しい答えを手に入れることだと思いがち」とある→正答
・エ 本文にそのような説明はない

採点ポイント: ①の直前の「だから」でつながる文を根拠にできているか。

3　問2（4点）

ア

第2段落で、「氷は水に浮く」と覚えていてテストでも書けるが、「なぜ氷は水に浮くのか」と問い返されると答えられない例を挙げ、そのあとで②を述べている。

・ア 第2段落の例にあたる→正答
・イ 覚えること自体は例になっていない
・ウ 全員が正解した例は挙げられていない
・エ 本文に出てこない

採点ポイント: ②の直前の「氷は水に浮く」の例を、根拠にできているか。

3　問3（6点）

(例) 学びが進んで、自分に見える範囲が広がった証拠だと考えている

正答例:

・(例1) 学びが進んで、自分に見える範囲が広がった証拠だと考えている（29字）
・(例2) 知識が増え、わかることの範囲が広がった証拠だと受け止めている（30字）

根拠: 第3段落に、「わからないことが増えるのは、見える範囲が広がった証拠なのだ」とある。わからないことが増えるのは、学びが進んで、見えるものの範囲が広がったからなので、悪いことではないと筆者は考えている。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「範囲」が使えている	1点	指定語必須
②「証拠」が使えている	1点	指定語必須
③ 学びが進んだ（知識が増えた）という内容が示されている	1点	「学びが進んで」等
④ 見える（わかる）範囲が広がったという内容が示されている	2点	「見える範囲が広がった」等
⑤ 25〜35字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

3　問4（4点）

イ

第4段落で、円の内側を「わかっていること」、外側を「わからないこと」とし、「学びが進んで円が大きくなると、外側と接する境目も長くなる」と述べている。この境目が、「わからない」と出会う場所にあたる。

・ア 本文は、わからないことが減るとは述べていない
・イ 第4段落の円のたとえによる説明→正答
・ウ わからないことは円の外側にある
・エ 本文の内容と反対

採点ポイント: 円の内側・外側・境目の三つを、本文のたとえどおりに対応させて読めているか。

3　問5（5点）

ア

「適切でないもの」を選ぶ問題。

・ア: 筆者自身の学校での体験談は、本文に出てこない→不適切→正答

・イ: 「たとえば」で氷の例を挙げ、主張を具体的に示している→適切

・ウ: 円のたとえで、知識とわからないことの関係を示している→適切

・エ: 最終段落は「だから」で始まり、ここまでの内容を受けて考えをまとめている→適切

採点ポイント: 「本文にあること」と「本文にないこと」を区別できているか。

3　問6（5点）

エ

筆者は、答えを手に入れて終わりにするのではなく、問いを持ち続けることが大切だと述べ、最終段落で「学ぶとは、答えを集めることではなく、問いを育てていくことなのだ」とまとめている。

・ア 本文は答えを急ぐことを勧めていない

・イ 「わからない」ことを恥じる必要はない、と述べている

・ウ 本文の主張と反対

・エ 最終段落の主張と、第3・4段落の内容を合わせた説明→正答

採点ポイント: 具体例と、最終段落の主張の両方を含む選択肢を選べているか。

4　問1（4点）

イ

「及ぶ」は「並ぶ」、「あるまじ」は「いないだろう」の意味。「おごる」は、いい気になってうぬぼれること。人々にほめそやされて、自分にかなう者はいないと思いこみ、師の教えも聞かなくなった。

・ア 「師の教へも聞かずなりぬ」とあり、へりくだってはいない

・イ 「われに及ぶ者は、あるまじ」は、「私に並ぶ者はいないだろう」の意味。「おごる」は「いい気になる、うぬぼれる」の意味→正答

・ウ はずかしがっているわけではない

・エ 「及ぶ者は、あるまじ」は、自分より上手な者はいないという意味

採点ポイント: 「及ぶ者は、あるまじ」の意味と、「おごる」の意味を、前後の流れとあわせて読めているか。

4　問2（4点）

ウ

②の直前に、「その音、さのみ巧みならねど」（その音は、それほど巧みではないけれど）とある。巧みさではなく、木こりの笛にこもった心が、弟子の胸に届いて、涙ぐんだのである。

・ア 「さのみ巧みならねど」とあり、巧みさに感動したのではない

・イ 叱られるのを恐れている描写はない

・ウ 「さのみ巧みならねど」（それほど巧みではないけれど）、「心にしみて」とある→正答

・エ 木こりが弟子をほめた場面はない

採点ポイント: 「さのみ巧みならねど」の「ねど」（〜ないけれど）を正しく読み、そのあとの「心にしみて」と結びつけられているか。

4　問3（4点）

ア

師は、「汝が笛は巧みなれど、人に聞かせんとのみ思ひて吹く。かの者は、ただ己が楽しみに吹く」と述べた。巧みなだけの笛は耳を驚かすだけだが、心のこもった笛は人の胸を打つ、すなわち、技だけでなく心をこめることが大切だと教えている。

・ア 「巧みなる」は技の巧みさ、「心ある」は心がこもっていることを指す→正答
・イ 吹く回数の話は出てこない
・ウ 音の大きさの話は出てこない
・エ 木こりが「いつでも」優れているとは述べていない

採点ポイント: 「耳を驚かす」と「胸を打つ」の対比から、師の教えを読み取れているか。

4　問4（4点）

(例) 人に聞かせることばかりを考えて吹くもの

正答例:

・(例1) 人に聞かせることばかりを考えて吹くもの（19字）
・(例2) 人に聞かせることだけを考えた笛（15字）

根拠: 師は、「汝が笛は巧みなれど、人に聞かせんとのみ思ひて吹く」と述べた。弟子は、自分が心をこめず、人に聞かせることばかり考えて吹いていたと気づき、恥じ入った。「とのみ」は「とだけ」の意味。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
① 人に聞かせること（聞かせようとすること）という内容	2点	「人に聞かせる」等
② 「ばかり」「だけ」など、それだけを考えていたという内容	1点	「ことばかり」等
③ 10〜20字の字数を守っている	1点	逸脱は減点